



1997年7月19日(土) - 9月28日(日)

◆開館時間 午前9時30分 - 午後5時30分 (9月17日以降は午後4時30分) ◆特別展観覧料 一般250 [200]円 高校生・大学生80 [50]円 小学生・中学生50 [30]円 [ ]内は10名以上の団体料金 ◆休館日 毎週月曜日 (ただし9月15日は開館)、9月16日 ◆主催 北海道立北方民族博物館 ◆協力 旭川市博物館、網走市立美術館、木村捷司記念室、斜里町立知床博物館、市立函館図書館、市立函館博物館、資料館ジャッカ・ドフニ、函館市北方民族資料館、北海道大学農学部博物館、河野 廣氏、金 喜多一氏、寺田 弘氏



# 樺太1905-45

## -日本領時代の少数民族-

第12回特別展



北海道立北方民族博物館

Hokkaido Museum of Northern Peoples

〒093 北海道網走市字潮見313-1 (天都山) 電話0152-45-3888



サハリン島がかつて日本領だったこともあって、カラフトやサハリンということばは、関係が深かった日本人には複雑な思いを含んでいることでしょう。

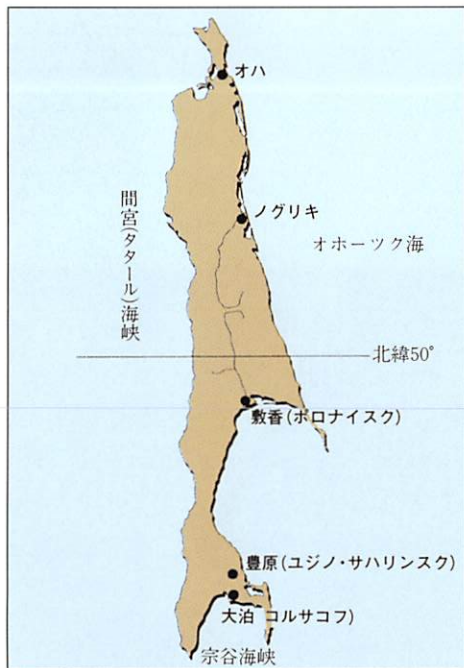
この特別展では、1905（明治38）年のポーツマス条約で日本が領有することになったサハリン島の北緯50度以南・樺太に暮らしていた少数民族に焦点を当てます。

当時、樺太には古くからの住民であるアイヌやウイльта、ニブフの他にウリチ、エベンキ、サハといった少数民族も暮らしていました。日本政府がこれら少数民族に対してとった政策は、特定の地域に定住化をすすめる、日本へ同化させることでした。



狩猟服姿のウイльта  
（撮影 木村捷司）

ウイльтаやニブフの女性は裁縫を得意としています。なめして柔らかくした革や布、白樺樹皮などを素材に、衣服、靴、帽子、下着、バッグ、箱など、生活のあらゆるものを自分たちの手で作り出しました。女性たちはただ作るのではなく、これらのものに伝統的なデザインの手刺し文様や切り抜き文様を施しました。色彩豊かな手刺し文様で飾った革製の工芸品は日本人へのみやげにもなりました。



領有後ほどなくアイヌは樺太の複数の集落に、アイヌ以外の少数民族についても、大正時代末ころから幌内（ポロナイ）川河口の敷香町オタスに定住がすすめられました。日本の小学校に準じた教育内容の教育所が設けられ、少数民族の「日本人」としての教育がなされました。昭和時代のはじめ、アイヌには戸籍が作られます。しかしアイヌ以外の少数民族にはそのようなことはなく、日本人からは「土人」と呼ばれ続けました。

太平洋戦争が始まった頃から、日本は、狩猟や漁撈（ぎょろう）、トナカイ飼育で生活してきた少数民族の男性たちを戦争に利用しようと考えました。それは隣国ソ連の動きを探るスパイ活動でした。



旭川市博物館蔵

革製の工芸品



当館蔵

表の写真は、1937  
（昭和12）年の樺太敷香  
町オタス。  
（撮影：服部 健）